《短　信》

アクセント核の逆算指定

柴田　武

東京語などの場合、アクセント核の位置を示すのに、語頭から数えて何拍めかを数字で表すことがある。これは、『新明解国語辞典』の前身『明解国語辞典』が初めて試みたもので、語形に直接アクセント核を示すだけのスペースがない場合には大変便利である。方言辞典（例えば、広戸惇・矢富熊一郎『島根県方言辞典』一九六三）に用いられたこともあり、計算機処理にも利用される。

しかし、この表示法がアクセント核を表わすのに理論的に正しいのかどうか、また、実用的にこれが最も有効な方法かどうか考え直してみる必要がある。

第一に、東京語の動詞・形容詞の終止形・連体形のアクセントは、無標でなければ、終りから数えて第2拍（これを⁻2で示す、以下これに準ずる）にある。

第二に、外来語のアクセント核は、原則として⁻3拍にある。

第三に、鹿児島市方言のように、語の長さを問わず、⁻1か⁻2のいずれかの音節にアクセント核のある方言がある。

以上のことは、アクセント核の位置を語頭から数えると、文節（語）ごとに異なっていて、「法則」的に説明できないことを意味する。（注）さて、『新明解国語辞典第四版』では、約八万語にアクセントが表示されているが、そのうち、二桁の数字（⑩⑪……）でアクセント核を示した語をアクセント型を基準に数えてみると三十四語ある。それらを、逆算した数値で示せば、大部分は6以下の一桁の数字（⑥⑤……）で処理することができる（表1）。それに対して、二桁で示さなくてはならなくなる語はわずか六語にとどまる（表2）。

表1（＋は前から数えた場合、－は後から数えた場合）

＋	－	度数	例
17	3	1	自動車損害賠償責任保険
13	4	1	アジア極東経済委員会
13	1	2	公共職業安定所・公共職業安定所「二個所に出る」
12	5	1	インダストリアルエンジニアリング
12	4	2	国際オリンピック委員会・インフェリオリティーコンプレックス
12	3	5	弁証法的唯物論・イソニコチン酸ヒドラジッド・中華民国国民政府・セントビンセントグレナディー・電子式卓上計算機
11	6	1	インダストリアルエンジニアリング
11	4	3	経済団体連合会・国際オリンピック委員会・指紋自動識別システム
11	2	1	天照（アマテラス）皇大神宮
10	5	1	指紋自動識別システム
10	4	1	特別天然記念物・シンクロナイズドスイミング・中央労働委員会・公正取引委員会・プログラム内蔵方式・ビタミンBコンプレックス・インダストリアルデザイナー・パークロルエチレン溶液・日本貿易振興会・ガイガーミュラー計

数管	10	3	4
農産物検査印紙・セントクリストファーネビス・浮動小数点記法・酒石酸水素カリウム			
ダウ式平均株価・文永・弘安の役・自動鋳造植字機	10	2	3

表2

	＋	－	度数	例
	5	10	1	特別養護老人ホーム
	1	12	1	冬期近代二種競技
	1	11	2	天叢雲（アメノムラクモノツルギ）剣・竹林の七賢人
	1	10	2	軽費老人ホーム・養護老人ホーム

日本語（東京方言）に限らず、一般に、音節または拍間の高低・強弱（・長短）差でアクセントを表す言語で、しかも、アクセント核が固定している場合は、語頭か、語末かでなければ、−2か−3かで、+2とか+3とかは見当たらない。『言語学大辞典』（三省堂）によれば、−2は、ポーランド語をはじめ、アッサム語（インド共和国アッサム州の公用語）、アリュート語（カムチャツカ半島など）、ウイルタ語（ツングース語）、イラヌン語（フィリピン諸語）、アイマラ語（南米中央アジア高原の言語）などに、−3はグルジア語（ただし四音節以上の長い語）に見られる。なお、術語としても、−2には penult (imate)、−3には antepenult (imate) が用意されている。この二語は、小型の英和辞典にさえ出ている。しかし、+2、+3などにはどういう術語があるのか知らない（ただし、原口庄輔氏によれば、あるにはあるという）。

以上のことを考えると、アクセント表示は、語頭でなければ、語末から数えていくつめで表わすのが妥当な方法と言うことができる。

しかし、このような逆算指定は今までもなかったわけではない。早く林大氏にその試みがあって、「文節のアクセント形式は、低くなるかならないか、低くなって何音節『何拍のこと』つづくかという点から分類される。」という説明がある。（「アクセント私見」跡見学園紀要一九五四年）ただし、柴田が言う「終りから何拍め」というのと違って、やはり文節初頭から見ていて、しかも数字が一つくい違う。

最近になって横山晶一氏がアクセント型を逆算した数値によって示している（「辞書見出し語のアクセントの性質について」日本音響学会講演論文集、一九七九）。ただし、計算の単位は拍ではなく、音節（syllable）である。

以上のことから、アクセント核の数字による表示には逆算指定によるべきではないかと考える。

注　東京方言では、第一拍に核が来ない限り、すべての文節は第一拍が低い、あるいは、第二拍から高くなる。また、和歌山県の竜神方言では、低起式はいつも第三拍から高くなる、あるいは第二拍まで低い。こういう現象は、本文に第一、第二、第三としてあげた逆算指定の妥当性を支持する理由と衝突する。しかし、右の東京方言、竜神方言の現象は、音韻論的に無意味な場合である。アクセント核は、音韻論的に有意味な位置に対応するものである。

——東京大学名誉教授——

（平成四年七月二十四日　受理）